



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第10代日本手外科学会 理事長に就任して

理事長 岩崎 倫政

目 次

- 第10代日本手外科学会理事長に就任して
- 前理事長挨拶
- 副理事長に就任して
- 理事に就任して
- 新名誉会員のご挨拶
- 新特別会員のご挨拶
- 2022年度 各委員会委員
- 物故会員への追悼文
故 Dr. Richard A Berger を偲んで
故 井上博先生を偲んで
- 教育研修会お知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記



この度、平田仁前理事長の後を継ぎ、第10代日本手外科学会(日手会)理事長に就任させていただきました。たいへん光栄に存じますと同時に、伝統ある本学会をさらに発展させるという重責に身の引き締まる思いであります。これを果たすには、会員の皆様の絶大なるご支援、ご協力が不可欠でございます。何卒よろしく願いいたします。

2019年12月に初の新型コロナ感染者が報告され、2020年3月にWHOがパンデミックを宣言して以降、われわれの日常は激変しました。そして、これは現在も継続しています。その中で、教育や研究も含めた医療環境には“変化”というより“変革”がもたらされたと言えます。この“変革”の時代において、平田前理事長は“ピンチをチャンスに変える”を合言葉に本学会を牽引されました。私も、この言葉を受け継ぎ、ポスト・ウィズコロナの時代を見据えた学会運営を会員の皆様と共に進めていく所存であります。

組織におけるきわめて本質的な課題には、deadlineやマニュアルは存在しないと言われていきます。したがって、自らが課題解決に向けて積極果敢に取り組んでいく必要があります。私が考える日手会の本質的課題は、1)若手外科医の育成、2)次世代のリーダーたる手外科医を育てる、3)ダイバーシティ(多様性)の推進、4)学術的基盤の向上です。学会発展の基盤は、人材にあります。将来を担う若手外科医を育成するのは当然ですが、学会を牽引できるリーダーシップを持つ中堅手外科医を育てていくことも重要です。多様性に関しては、男女にとどまらず職種、

世代、地域性などの多様性を考慮した学会運営がこれからの時代には不可欠です。さらに、国内の関連学会や海外のHand Societyとの交流も、日手会の国内外におけるstatusの向上には不可欠です。学術的基盤の向上では、特に基礎研究の重要性を学会が再認識し、若手外科医にこれを推奨していくことが手外科の発展に繋がると考えます。評議員をはじめとする会員の皆様のご意見やアイデアを広く受け入れ、これらの課題に取り組んでいく所存であります。

現在進行形で取り組んでいる重要課題もいくつかあります。その中のひとつが、日本専門医機構認定サブスペシャリティ(サブスペ)領域への申請に関するものです。日手会は本認定を目指して機構に申請しておりましたが、残念ながらこの春の理事会審議でサブスペ認定されませんでした。これに関しては、機構側からの審査結果・意見を参考に、これまで通り機構認定を目指して対応していく予定です。

上述したポスト・ウィズコロナ時代の到来に加えて、2024年から本格導入される医師の働き方改革、遠隔医療やAIなど医療への先端テクノロジーの本格導入、製薬企業等と学会との関係変化など本学会を取り巻く環境は予測困難な状況であります。一方、世界のアカデミア団体は新時代の到来に向けて毅然と立ち上がっています。理事長の任期は2年という短い期間ではありますが、若い世代を含めた会員の皆様と共に、全力を挙げてこの難局に立ち向かう覚悟でございます。

少し長くなりましたが、これを持ちまして私の理事長就任のご挨拶とさせていただきます。



前理事長挨拶

前理事長 平田 仁
名古屋大学大学院



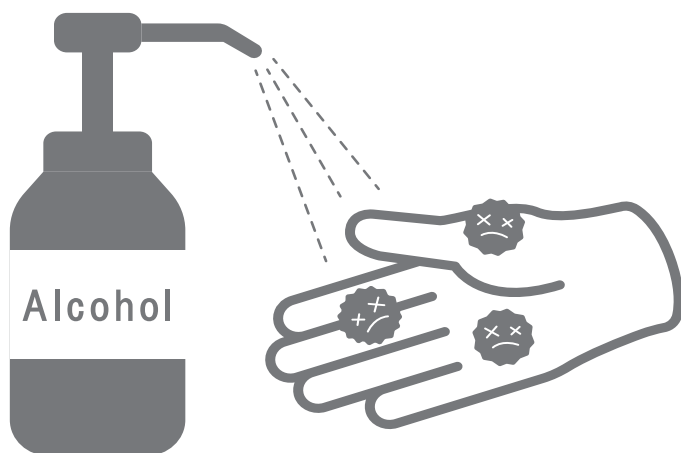
オミクロン変異株BA5による第7波が拡大を続けていますが、皆様いかがお過ごしでしょうか？重症化率は大幅に低下しておりコロナ病床への負荷は大きくないと思いますが、非常に高い感染力により隔離対象となる医療関係者が急増しており、一部には診療体制の維持が困難な医療機関も出ているようです。この状況は医療機関に限られたものではなく、凡そすべての業界が通常の営業体制の維持に困窮し始めており、感染法上の分類を就業制限や入院勧告・措置を求める2類から通常のイン

フルエンザなどと同等の5類へと変更すべしと政府に要望する動きも活発化してきました。

私が理事長を拝命したのはダイヤモンドプリンセス号でのクラスター発生から2ヶ月後の2020年4月でしたのでアルファ株による第1波が拡大局面に差し掛かる中での着任となりました。退任した2022年4月は第6波の只中でしたので厳しい行動制限のもとで学会を運営するという未知の体験をさせていただきました。日本手外科学会は他の学会に先駆けて学会雑誌の電子化を実現するなどDXへの意識はそれなりに高かったのですが、予算の制約もあり事務局システムのオンライン化が遅れており、“発足以来初のバーチャル理事長”をキャッチフレーズにコロナ禍だからこそ推進できる学会改革を掲げてはみたもののさまざまな厳しい現実に直面し、改めてDX推進の重要性を痛感することとなりました。敢えて成果を挙げさせていただくとすれば、手外科専門医制度の礎とすべくEBMを意識したオンライン雑誌・マガジンの改革に着手したこと、手外科指導医制度の立ち上げによるサブスペシャリティ体制の充実の2点となります。日本手外科学会は外科系領域の中で最も早く学会主導の専門医制度を立ち上げ、既に1000人を超える専門医を認定しています。専門医にはEBMに基づく医療の実践が求められますが、その前提となる情報発信基盤が未整備だったため学会雑誌やオンラインマガジンにEBMを意識した記事の掲載をお願いし、また、専門医試験委員会や機能評価委員会などにこれらと連動して試験問題の作成や評価ツールの整備を推進していただくように運用を変更させていただきました。指導医制度は本来もっと早くに整備しておく必要がありましたが、専門医制度委員会や情報システム委員会のコロナ禍をもものともせぬ奮迅の活躍により短期間に、しかも大変充実した形で実現することができ、これにより日本専門医機構の求めるサブスペシャリティの要件をすべて満たすことができました。

パンデミックの終息について興味深い記事がNew York Times誌に載っていました。パンデミックの終息にはmedicalとsocialという二つのタイプがあるというものです。前者は、天然痘が代

表的な例であり、医療により感染が克服されて感染者数と重症者数が激減し、最終的にはWHOにより根絶が宣言されるというパターンです。これに対し後者は、言ってみれば民衆の感染対策疲れであり、感染を受け入れて共存を覚悟することで通常の生活に戻っていったというものです。covid19については、強力な新規医療技術をタイムリーに投入しても感染拡大は一向に抑制できず、欧米では政府がwith coronaでの行動制限の緩和や社会活動の再開を次々と決定しており、この方針に対して社会からの反発もほとんど見られないようです。それどころか、人々はこの状況を喜び、積極的に受け入れているようにすら見えます。日本の政府も第7波が拡大する中でも欧米に追随する姿勢を崩しておらず、市井には感染法上の分類の見直しによる行動制限の解除を求める声も日に日に高まっています。どうやらsocial endingに帰結しそうな流れとなっていますので、日本手外科学会も岩崎理事長の元でポストコロナに向けていよいよ動き出す時期に入ったように思います。皆様の益々のご活躍と日本手外科学会の更なる飛躍を心より祈念いたします。



副理事長に就任して

副理事長 西田 圭一郎

岡山大学学術研究院医歯薬学域 整形外科



この度、岩崎理事長ならびに理事の皆様にご推挙いただき、令和4年度日本手外科学会副理事長に就任しました。多くの諸先輩方が大切に育ててこられた伝統ある日本手外科学会においてこのような大役を仰せつかり、身の引き締まる思いです。

令和2-3年度の1期目では、専門医制度委員会と専門医試験委員会を担当させていただきました。第2期目は財務委員会(三浦俊樹委員長)、緊急事態対応委員会に加え、引き続き専門医制度委員会(稲垣克記委員長)を担当させていただきます。財務委員会では、事務局のお力添えを頂きながら、事業計画に沿った収支の処理対応、期中の財務内容の監査を行い、健全な学会運営を行って参ります。図らずもコロナ禍で浸透した教育研修会や各種委員会のオンライン化を継続していただき、支出の抑制にも務めて参ります。緊急事態対応委員会は、平田前理事長のご発案で発足した委員会で、各委員会の枠組みを超えて、突発的な事態に対して迅速な対応・判断を行う委員会です。日手会事業の中でも特に学術集会や研修会、ワークショップなどの開催の可否、開催形態の変更など、未だ先の見えない世界的なコロナ感染症の拡大が続く中で、学術集會会長・各委員会担当理事と緊密な連携のもと柔軟に対応して参ります。

1期目の専門医制度委員会では日手会の大きな目標である日本専門医機構サブスペシャリティ認定を目指すよう平田前理事長よりご下命を受け、前委員長の田中克己先生にもご助言を頂きながら提出書類(レビューシート)の作成に取り組みました。理事会・各委員会、会員の皆様のお力添えを得て指導医制度も発足し2022年1月にレビューシートを提出することができました。審議の結果、2021年度に機構認定サブスペ領域専門医に申請された13領域のうち、手外科領域を含む6領域が専門医機構の理事会決定で改訂された外形基準4項目に完全に合致し、委員会の委員による専門医像を含む各項目の審査(5段階評価)においても認定に十分な得点を得て推薦されました。2022年4月15日に最終的な個別審議が行われましたが、残念ながら、手外科領域は本年度の認定に至りませんでした。

「手外科はジェネラルな領域ではないから機構認定にせずに学会認定・機構承認のカテゴリーの方が相応しいのではないか」との日本専門医機構理事会審議での意見があったとの通知を受けておりますが、現状では「学会認定・機構承認のサブスペシャリティ」はいまだ不明な部分も多く、日手会理事会としては引き続き機構認定サブスペを目指す方針としております。一方で、「手外科領域は脳機能や全身性疾患にも関わるジェネラルな領域である」ことをさらに強調してレビューシートに盛り込み、専門医機構のご理解を得たいと考えております。また、本年度にはレビューシート更新のため、専門医の先生方には再度Web上で実態調査をお願いすることになるかと存じます。前回同様、

短時間で回答できる内容ですので、何卒ご協力いただけますようお願いいたします。

微力ではございますが岩崎理事長を支え、日本手外科学会の発展に全力を尽くす所存ですので、ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

.....

副理事長 古川 洋志
愛知医科大学 形成外科



副理事長を拝命しました、愛知医科大学形成外科の古川洋志です。就任のご挨拶を申し上げます。本学会のために一生懸命頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2年前から広報渉外担当理事として理事会に参加しております。その際には理事会の皆様、前担当理事の平瀬雄一先生、広報渉外委員会の前前委員長の佐竹寛史先生より多くの助言をいただきました。遅ればせながら感謝申し上げます。その後は広報渉外委員会の前委員長の岸陽子先生と、委員の皆様素晴らしい活躍を拝見させていただきました。本学会の英文ホームページ作成(BACKGROUNDの記述について生田義和先生に大変お世話になりました)、学会による後援の活動条件の規約化(定款委員会の皆様ありがとうございました)において、広報渉外委員会の委員の先生方は、関連の委員会と協力しながら2年間一生懸命活動していただき、感謝申し上げます。この挨拶文を号外号に掲載していただくのも、手外科ニュースの発刊に尽力する広報渉外委員会の皆さんの力と、事務局の皆様のご尽力によるものです。また、「手外科温故知新」を長く連載していただいた上羽康夫先生に感謝申し上げます。「手外科温故知新」は上羽先生のご厚意で、会員専用ページ上に掲載させていただいております。

もう一つ、平田前理事長の構想の実現に向けて、オンラインフォーラムの開催とアンケートによる講評を、アンケート調査対応委員会の岸陽子先生と、フォーラムの選抜メンバーと行ってまいりました。私は、これらの活動で多くのことを皆様から学ばせていただきました。

今回、専門医資格認定・施設認定委員会の担当と、引き続き広報渉外委員会担当理事を拝命いたしました。指導医も含めた認定の責任も負うようしっかりと対応して参ります。専門医資格認定・施設認定委員会の委員長になられた長谷川健二郎先生、広報渉外委員会の委員長になられた寺本憲市郎先生に、リードしていただき、前委員長の中尾悦宏先生、岸陽子先生にはアドバイザーとして委員会をサポートしていただく予定です。

形成外科医ですので、当然、本学会において形成外科の会員数が増えることを願っています。しかし一方、手外科学会は、機構によるサブスペシャリティの認定や、手外科のプレゼンス向上を目指しており、自身が形成外科医であることを一旦外において、岩崎理事長のもと、学会全体が目指す目標の実現に向けて協力し努力して参りたいと思います。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

理事に就任して

池上博泰

東邦大学医学部整形外科学講座 教授



2022年4月に開催された定時総会において、一般社団法人日本手外科学会理事に選出していただき、ありがとうございます。大変光栄に思うと同時に、責任の重大さを痛感しております。もとより微力ではありますが、少しでも会員の皆様のお役に立てるよう全力を尽くす所存ですので、何卒よろしくお願いいたします。

私は1985年に慶應義塾大学医学部を卒業し、直ちに同大学整形外科に入局いたしました。卒後3年目の平塚市民病院出向中に石黒先生のご指導のもと手外科に興味を持ち、慶應義塾大学手の外科グループに加えていただきました。ニワトリの腱を使用した基礎研究の際をはじめとして、これまで多くの先輩、同僚、後輩に支えられてきました。1994年にはボストンのMassachusetts General Hospitalに留学させていただき、1997年からは慶應義塾大学病院で勤務してきました。2012年4月に慶應義塾大学から東邦大学に異動し、現在、東邦大学医学部整形外科学講座(大橋)に勤務しております。

日本手外科学会では、2014年から2018年までは社会保険等委員会、情報システム委員会担当理事として活動をさせていただきました。

今回、本学会理事として国際委員会担当を拝命しました。国際委員会の主な活動は、日本手外科学会の国際化とそのため海外との交流です。みなさまご存知の通り、現在、米国手外科学会、香港手外科学会、韓国手外科学会、台湾手外科学会との間で日本手外科学会からトラベリングフェローの派遣を行っています。国際委員会では、日本手外科学会会員が、フェローとして海外で活躍できる環境をサポートしていければと考えています。

ただ、2020年からCovid-19の影響で、実際のトラベリングフェローの派遣が行われておりません。このCovid-19の状況はまだまだ予断を許さない状態ではありますが、海外との交流の準備は怠らずに活動していきたいと思っています。そのためにも、トラベリングフェローの選出は例年通り行う予定ですので、会員みなさまの積極的なご応募をお待ちしております。

私自身は、日本手外科学会のトラベリングフェローの経験はありませんが、日本整形外科学会、日本肩関節学会のトラベリングフェローとして選出していただき、海外の学会との交流をさせていただきました。その際に経験したことは、その後の整形外科医としての活動のみならず、少々大袈裟ではありますが人生の糧となっております。

本学会は会員数も増え、法人化や専門医制度の開始によって、4年前に理事に選出いただいた頃と比べるとますます発展してきております。そのような中で、特に若い会員にとって魅力ある学会になるよう努力することが私の責務かと考えております。理事長の岩崎先生を支え、明るい未来のある学会を目指して参りたいと存じますので、会員皆様の温かいご理解とご支援をお願いいたします。

池口良輔

京都大学医学部附属病院 整形外科 リハビリテーション科



この度、日本手外科学会理事を拝命いたしました京都大学リハビリテーション科の池口良輔と申します。日本手外科学会会員の皆様に、僭越ではございますが、ご挨拶申し上げます。宜しくお願ひ申し上げます。

私は1993年に京都大学を卒業後、京都大学整形外科に入局し、手の外科、マイクロサージャリー、外傷外科を専門として参りました。1995年に日本手外科学会に入会し、2007年に手外科専門医を取得し、2018年からは代議員を拝命いたしました。日本手外科学会に入会してから27年になり、これまで手外科について勉強させていただいた分、これからは理事として学会の発展に尽力したいと思っております。2018年から編集委員を務め、2020年からは編集用語委員会委員長を拝命し、前任の面川庄平前担当理事とも協力して、日本手外科学会雑誌の発刊だけでなく総説の掲載にも携わってきました。これからの2年間、編集用語委員長としての経験をもとに、手外科学会雑誌の質の向上と手外科用語集の改訂に取り組んで行きたいと思ひます。

日本手外科学会雑誌の投稿の中で、質の高い論文がある一方で、学術的な体裁をなしていない論文や投稿規定に沿っていない論文があるのも事実です。会員の皆様に読んでいただける、学術的に参考になる論文を掲載し、日本手外科学会雑誌の質を担保するために、2年前から論文査読を厳格にすることになりまして、過去2年間は75%から80%ぐらいの採択率となりました。厳格とはいひましても、決して低い採択率ではございませんので、会員の皆様におかれましては、奮って投稿していただければと思ひます。小田良委員長、河村健二アドバイザーをはじめとする編集委員の先生方と協力して、査読を円滑に行ひ、良質な学会誌の発刊を続けていきたいと思ひます。代議員の先生方におかれましては、ご多忙の中恐縮ですが、査読業務に関してご協力賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

日本手外科学会創立60周年を記念して創設された日本手外科学会奨励賞(田島達也賞・津下健哉賞)の審査も、編集用語委員会の重要な業務の一つです。今年度は第6回となります。8月1日公示を行ひ、応募期間は9月1日から10月1日です。45歳以下の日本手外科学会正会員である若手研究者におかれましては、2021年第64回日本手外科学会学術集会にて主演者として発表した演題で、日本手外科学会雑誌第38巻に掲載された学術集会発表論文が対象となりますので、奮って応募いただくようお願い申し上げます。

岩崎倫政理事長のもと、理事、代議員の先生方とともに、伝統ある日本手外科学会の発展に尽力していきたく思ひしております。会員の皆様におかれましては、今後とも御指導御鞭撻の程、宜しくお願ひ申し上げます。

内山茂晴

岡谷市民病院 整形外科



今回2期目の日本手外科学会理事に就任いたしましたので、ご挨拶を申し上げます。簡単に私の職歴を紹介します。1985年群馬大学医学部卒、同年故寺山和雄教授率いる信州大学整形外科に入局、その後関連病院勤務を経て1992年～1994年、アメリカミネソタ州メイヨークリニック、バイオメカニクス研究所に留学し、腱、関節の生体力学的研究に従事しました。帰国後は諏訪赤十字病院に勤務、2006年から信州大学整形外科講師、2008年より運動機能学教室准教授に就任、2017年より岡谷市民病院整形外科勤務、最前線の現場で臨床に没頭しております。信州大学時代は加藤博之先生（現在名誉教授）のもとで手外科と骨粗鬆症の研究と臨床に専念させていただくことができました。

1986年に日手会会員になり、かれこれ36年が過ぎました。手外科を取り巻く環境は激変し、その討論内容もまた然り。高度経済成長時代後の安定成長期とは異なり、当地では腱断裂や神経断裂の症例は減少、代わりに高齢者の変形性関節症、手根管症候群、腱鞘炎、外傷では脆弱性橈骨遠位端骨折が主となってきています。将又3年目に入ったコロナ禍により患者動向は変化し、今までとは違う、漠然とした不安を感じます。手外科センターや大学病院等超専門的診療を行う施設はさておき、私の勤務するような一般病院での手外科医は、日常的には今後も増加する超高齢者の変性疾患、骨粗鬆症を基盤とした脆弱性骨折に向き合っていかなければなりません。多くの会員の皆様も同じような状況にあると思われます。これらの疾患はいずれも手のみではなく、全身の関節や骨に関連しており、それらの理解が不可欠です。手外科医も技術の習得に加え、骨代謝などさらなる勉強が必要とされる時代が到来します。それに対応していけるように今までの経験を活かし、本学会の更なる発展に微力ながら尽くしたいと思ひます。会員の皆様におかれましては、今後ともなお一層のご指導や激励をいただければ幸いです。

篠原 孝明

大同病院整形外科 手外科・マイクロサージャリーセンター



本年度より理事を拝命しました大同病院整形外科/手外科・マイクロサージャリーセンターの篠原孝明と申します。私は1994年に大阪医科大学を卒業し、半田市立半田病院で、当時から行われていた名古屋大学方式研修(非入局スーパーローテート研修)を開始しました。所属病院では上肢外傷症例は多数ありましたが、手外科医が在籍していなかったため、手外科治療を学ぶ目的で名古屋掖済会病院の木野義武先生や名古屋大学医学部附属病院分院の中村蓼吾先生、井上五郎先生の手術を見学させていただく機会を得て、手外科医へのあこがれをいただくようになりました。2000年に東海病院に赴任し、鈴木正孝先生から本格的に手外科治療を指導していただけるようになり、2004年に名古屋大学手の外科に帰局しました。帰局後は初代教授の中村蓼吾先生から直接ご指導をいただき、堀井恵美子先生からも肘関節外科や先天異常を中心にご指導いただきました。2005年より平田仁先生が二代教授に就任され、手外科臨床はもちろんのこと、上肢機能評価票Hand20や静脈還流用循環補助システムHand Incubator開発のお手伝いをさせていただきながら、研究、イノベーションの実践についてもご指導いただきました。

この度アンケート調査対応委員会の担当理事を仰せつかりました。この委員会は、手外科外傷・疾患に関するエビデンスに基づく情報発信は臨床医学系学会の最も大切な役割であり、少しでも多くの会員が関わって正しい情報を構築し、国民の要望を聞き、求めに応じて情報発信をできる仕組みを作るべきだとの考えから平田仁前理事長の発案で2020年に発足しました。活動実績としては、医療関係者及び企業の研究者間におけるコンソーシアムを形成し、偏りのないエビデンスレベルの高い情報発信を行うことを目的として、手の変形性関節症をテーマに2021年11月3日、第1回オンラインフォーラムが開催されました。このフォーラムは日手会のHP上に掲載されていますので、是非閲覧していただくようお願いいたします。発足して間もないため、委員の先生方と話し合いながら今後の委員会運営を考えていく必要がありますが、手外科の社会的認知度を高めること、日本手外科学会と企業の研究者が協同して一般市民における手に関するアンメットニーズを探り、研究開発の基盤を作ることを目的に活動することで、アンケート調査対応委員会が日本手外科学会に貢献していければと思います。

岩崎倫政理事長のもと、会員の皆様のご支援ご協力を仰ぎながら、本学会のさらなる発展に寄与できるよう尽力する所存です。なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

副島 修

もち浜 福岡山王病院 整形外科



この度、2期目の理事を拝命いたしました副島 修です。日本手外科学会会員の皆様へ謹んでご挨拶を申し上げます。1期目の2年間は、キャリアアップ委員会と手外科専門医検討委員会の担当理事を務めました。今期も引き続き二つの委員会を担当させていただきます。

キャリアアップ委員会は、専門医偏在対策と男女共同参画の二つのワーキンググループを中心にこれまでも精力的に活動されていましたが、担当となってから、日手会HPにキャリアアップ委員会のバナーを設置して、活動状況や手外科研修施設などを掲載し会員への更なる周知を図っています。また、会員への啓蒙が重要な仕事の一つであるため、学術集会において委員会セッションを設けることを理事会でご承認いただき、2021年総会での第一回委員会セッションでは「専門医地域偏在に関するアンケート調査結果と問題点」について報告しました。調査結果より、専門医少数地域での受験資格取得の困難な状況が浮き彫りとなりましたので、専門医3名以下の県での特例措置を理事会に提案し、第14回専門医試験(2023年実施予定)より適用されるようになりました。2022年総会での第二回委員会セッション「上司と歩む手外科女医キャリア」も大変好評であり、主催者として喜んでおります。さらに、総会での託児所利用費に対する学会からの補助もご許可頂き、2022年の学術集会より運用されています。7月末の理事会では、以下の4点について要望書を提出しました。今後も会員のキャリアアップに向けて、各方面で活動を継続していきたく考えています。

- 1) キャリアアップに関する相談窓口の創設について
- 2) 日本医師会女性医師支援センター補助金事業による講習会の開催について
- 3) トラベリングフェローの女性会員採択推進に関する要望への対応について
- 4) 女性理事枠の創設・女性理事就任について

専門医検討委員会は他の専門医関連委員会と協働して、日手会(手外科領域)がサブスペシャリティ領域として専門医機構に認定されることを目標に活動している委員会です。これまで執行部での多くの時間と労力をかけて機構へ申請書類を提出していましたが、先日 機構より届いた残念な回答を受け、委員会を開催して今後の対応について協議を行いました。様々な意見が出されましたが、理事会へ以下のような提言を行っております。

- 1) 手外科は手に関する幅広い分野を扱うサブスペシャリティ領域であり、外傷外科だけではないことがわかるようなHPづくりが必要ではないか。
- 2) 手外科理事長名で、各大学主任教授宛に手外科専門医を大学病院に配置して頂くようお願いしてはいかがか。
- 3) 今後は手外科への理解を求めるべく、機構理事、委員に個別にアプローチする必要があるのではないか。

引き続き、機構認定を目指して努力を続けてまいります。

これからも、新しく理事長に就任された岩崎倫政先生のご指導のもと、理事、代議員の先生方と共に日本手外科学会の更なる発展に尽力する所存です。会員の皆様には、今後ともなお一層のご指導とご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

.....

田 尻 康 人

東京都立広尾病院 整形外科



このたび日本手外科学会理事に就任いたしました東京都立広尾病院の田尻康人です。はじめに自己紹介をさせていただきます。

私は昭和61年に東京大学を卒業し、故黒川高秀先生が主宰されていた東京大学整形外科学教室に入局いたしました。東大整形外科には他の大学にはない神経診という専門診療グループがあり、脊髄グループと末梢神経グループとが元々一緒に外来診療をしていました。私が入局した頃には別々に診療を行っており、私は子供の頃から神経組織に興味があったため火曜日午後に行われていた末梢神経診に参加させていただき、長野昭助教授(当時)、落合直之分院講師(当時)のご指導の下、診断学や電気生理学的検査の重要性を学びました。その頃は腕神経叢損傷の患者さんが非常に多く、毎週深夜に及ぶ手術があり大変多くの手術の経験をさせていただきました。また、研修医の時にオーベンの黒島永嗣先生がされた有茎血管柄付DIP関節移植の初手術の助手をさせていただきこともよく覚えております。その後平成11年から大学で、また平成15年からは都立広尾病院において指導する立場となり、手外科、特に腕神経叢損傷や特発性前・後骨間神経麻痺を中心とした末梢神経障害の診療・教育に携わってまいりました。

手外科学会代議員の活動としましては、財務委員会委員、WEB登録委員会委員長を務めさせていただき、現在は西田圭一郎副理事長が委員長をされている専門医制度委員会の委員をお引き受けしております。そして今回新たに社会保険等委員会の担当理事を拝命することになりました。私は東京都の国保保険審査委員を11年務めており、また現在は日本整形外科勤務医会の事務局をお引き受けしている関係で、厚生労働省の医療技術に関するヒアリングにも2度立ち合わせていただきました。これらの経験を生かし、保険診療における手外科関連手術が正しく評価されるよう努力したいと考えます。特に、同じ手術顕微鏡を用いる手術であっても極めて短時間で高額の点数を得ている眼科領域などに比べると、手外科関連手術は、精緻な手術技量と長い手術時間の割に全く見合っていないように感じます。このような手術の技量を正当に評価していただけるよう尽力してまいりたいと存じます。

また、大学ではなく一般病院に勤務する勤務医の立場や病院管理者の立場から、医師の働き方改革やダイバーシティ&インクルージョンの課題、後期研修制度などにも関心を持っております。手は高度に発達し複雑な機能を有する器官ですが、手外科そのものは整形外科の5大分野の一つで

あり、全ての整形外科医、形成外科医が学ぶべき領域であります。専門性を高めると同時に間口門戸を広げる努力も必要ではないかと考えております。

岩崎理事長を支え手外科学の進歩並びに手外科学会発展のために尽くしてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

福 本 恵 三

埼玉慈恵病院 埼玉手外科マイクロサージャリー研究所



この度理事を再任させていただきましたことを皆様へ感謝申し上げます。

私は1986年に東京慈恵会医科大学を卒業し、手外科医になろうと思い形成外科で研修を始めました。当時形成外科学講座主任教授であった丸毛英二先生が手外科を専門とされていたためです。学生であった私は、手の外科学会に参加するまで日本の手外科は整形外科が主流であるとは知らなかったのです。手外科は整形外科と形成外科の双方の技術と知識を要する分野ですが、私にとって幸いだったのは慈恵医大形成外科が整形外科から分かれて発足したため、指導医の多くはもともと整形外科医であったことです。設立初期の手の外科学会では、形成外科医がなぜ手外科をするのかと言われるようなこともあったそうですが、私たちの時代にはそのようなことは無く、かえって毛色の違う者として一目置いて大事にさせていただいたように感じていました。若い世代の形成外科の先生方には、臆することなくご自分の仕事をどんどん学会で発表していただきたいと思います。整形外科の先生方とは一味違った視点から、思わぬプレイクルーが生まれるかもしれません。日本手外科学会は日本整形外科学会と日本形成外科学会のサブスペシャリティとしての立場を確立しながら発展してきました。整形外科と形成外科がさらに協調し、協力して行くことが手外科の進歩につながります。私は形成外科出身の手外科医として、整形外科と形成外科の間を繋ぐことで学会の発展に寄与し、会員の皆様のお役に立ちたいと思っています。

2期目も引き続き先天異常委員会と倫理利益相反委員会を担当させていただきます。

先天異常委員会は先天異常のスペシャリストが委員となって、学術集会での先天異常懇話会の開催、学会ホームページの先天異常相談窓口の運営など、会員の皆様へ情報提供やアドバイスをこなっています。また、委員会として先天異常に関する研究を行っており、これまで先天異常分類マニュアル(IFSSH修飾分類法)、母指多指症術後評価表、合指症術後評価表などを世界に発表してきました。今年度は斎藤晋委員長のもと、治療に役立つ新しい概念の母指多指症の分類法を確立すべく、準備を進めています。

倫理利益相反委員会では、倫理審査とともに日本手外科学会のCOI管理を行なっています。2022年3月に日本医学会COI管理ガイドラインが改定されました。この改定に沿って、日本手外科学会のCOIに関する指針、細則の改訂を行って参ります。具体的には学会誌投稿における利益相反COI申告書として国際基準であるICMJE DISCLOSURE FORMの採用、日本医学会利益相反管理規定と日

本手外科学会各細則との齟齬の修正などであります。

理事会は岩崎倫政理事長のもと、新しい体制となりました。理事の一人として理事長を支え、2年の任期をしっかりと勤めて参る所存です。皆様どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

.....

松 田 健

新潟大学医歯学総合研究科 形成・再建外科



この度令和4年度日本手外科学会理事を拝命しました、新潟大学形成外科の松田健と申します。日本手外科学会会員の皆様に謹んでご挨拶を申し上げますとともに心より感謝申し上げます。私は奈良県出身で、1996年に大阪大学を卒業後、すぐに大阪大学形成外科に入局しました。入局といっても当時は皮膚科内の診療班に過ぎなかった大阪大学の形成外科ですが、現在の巨大(あくまで形成外科では、ですが)な教室の体制を見ると隔世の感がございます。大阪では大学病院をはじめ様々な関連施設で研修しました。

私がマイクロサージャリーの世界に本格的に足を踏み入れるきっかけとなりましたのは卒後3年目に兵庫医科大学の耳鼻咽喉科へ異動になったことでした。なぜ耳鼻咽喉科と思われるかもしれませんが、当時はこちらも形成外科は耳鼻咽喉科内の診療班、現教授の垣淵正男先生と私の2人(+耳鼻咽喉科研修医のローテーター)というような体制でありました。兵庫医科大学では遊離皮弁を用いた頭頸部再建と併行して外傷治療にも多く携わり、手のデグロービング外傷への遊離皮弁や切断指再接着なども経験しました。一般外科研修の後、母校の大学院に進み、端側神経縫合を用いた新たな顔面神経再建法の基礎研究を行い、学位を取得しました。その後2007年よりオーストラリア、メルボルンのBernard O'brien Institute (Prof. Wayne Morrison)へ留学し、メルボルンではMorrison教授執刀のWrap-around flapの助手も何度かさせていただくなど、充実した2年間を過ごしました。

帰国後もマイクロサージャリーを用いた再建外科や再接着などを中心に診療を続ける傍ら神経移植術・移行術に関する末梢神経の研究も続けていたこともあって前任の柴田実先生にお声掛け頂き新潟に赴任、現在に至ります。皆様の御存知の通り新潟には偉大な手外科の先生方が多くおられ、大変良い勉強をさせていただいております。現在の新潟大学での私の手外科診療は先天異常やリンパ浮腫に対する治療を中心としたものとなっております。

日本手外科学会では以前よりカリキュラム委員会、(旧)用語委員会などに参加させて頂いておりましたが、特に感銘を受けましたのは前回より参加させていただきました専門医試験委員会です。試験問題作成に対する委員の先生方の真摯な姿勢、Webex上での徹底的なBrush upに厳選された良問を作成、試験結果の詳細な分析並びに次年度へのfeed backなど、多くを学ばせていただきました。この度は専門医試験委員会と学術研究プロジェクト委員会の担当理事を仰せつかりました。浅学非才の若輩者ではありますが、日本手外科学会発展のために全身全霊で献身していく所存であります。特に以前よりの課題であります、形成外科領域における手外科への啓発・学会における整形外科医

と形成外科医の連携の強化を通してますますの学会の発展を図りたいと考えております。

今後とも会員諸先生方の温かいご支援と、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしく申し上げます。

.....

村 瀬 剛

ベルランド総合病院 整形外科



日本手外科学会理事に就任いたしましたベルランド総合病院の村瀬剛です。今回2期目であり、前回に引き続き日手会と日本の手外科発展のために尽くしたいと存じます。

私は昭和62年に大阪大学を卒業して整形外科教室に入局、阪大関連病院での研修、フランス留学を経て、2001年より今年3月まで大阪大学で手外科のチーフを務めてまいりました。この間、3次元画像を用いた手術シミュレーションや関節キネマティクス研究を中心とした研究を展開し、積極的に情報発信をして参りました。本年4月からは、大阪堺市のベルランド総合病院に赴任し急性期医療を中心とした地域医療に携わる傍ら、大阪大学にも籍をおいてライフワークである上肢変形の3次元矯正システムの開発・臨床研究に関わっています。

前回の理事会で私は、教育研修オンラインマガジン運用委員会、機能評価委員会、情報システム委員会の3つの委員会と学術集会等WEB開催対応特別委員会WGの担当理事を務めさせていただきました。これからも引き続きこれらの委員会・WGを担当いたしますので、よろしくお願い致します。

過去2年間、教育研修オンラインマガジン運用委員会では山本美知郎委員長を中心に教育研修会のWEB開催を極めて迅速に取りまとめ、2021年と2022年の1~3月にオンライン開催しました。視聴者からも高くご評価頂きました。一方、face to faceで意見交換できる場も欲しいとの要望も根強いことから近い将来はハイブリッド開催も考えています。オンラインマガジン(Hand Now)では、学術集会において注目を集めた演題をさらに掘り下げるべく演者へのインタビューを交えて作成した動画コンテンツ「BackStories」が出色の出来です。会員の先生方には是非、同サイトを視聴して知識をアップデートしていただければ幸いです。また、Hand Now Q&Aコーナーの問題は、最新の日手会誌レビュー論文と連携するよう工夫が凝らしております。さらに、コロナ禍で途絶えていたカダバーワークショップを今年度から再開いたします。受講者の技術・知識の向上に寄与できる会になるよう努めてまいります。

機能評価委員会では金内ゆみ子委員長のもと、コロナ禍で滞っていたHand20、FIHOA、SW触覚の評価マニュアル(日ハ会リンク)の掲載を含む日手会HP「手の機能評価法」ページを刷新しました。これらの作業と並行して上肢可動域計測マニュアル、握力計測マニュアルを策定すべく、それぞれWGを結成して活動しています。4月には握力測定の実態調査(Webアンケート)を実施いたしました。大変興味深い結果が得られておりますので、近いうちに取りまとめて公表するとともに、この結果を参考にしてマニュアル作成を進めてまいります。

情報システム委員会では、西浦康正アドバイザー、松浦祐介委員長のもと日手会システム第2フェーズの構築を目指して作業を進めています。必要な項目と優先順位を確定し、手分けをしながら着実にすすめております。近いうちに様々な事務作業がオンラインで完結できるものと期待しております。

あと一期、前回の理事会で与えられたミッションを達成し、会員の皆様にお役に立てるよう貢献してまいりたいと存じます。先生方のご支援をよろしくお願い致します。



新名誉会員のご挨拶

名古屋大学大学院 平田 仁



この度伝統ある日本手外科学会の名誉会員に加えていただきましたことは身に余る光栄であり、ご推挙いただきました理事会・代議員会の諸先生、そして学会員すべての皆様に深く感謝申し上げます。

私は昭和57年に三重大学医学部を卒業し、同時に整形外科学教室に入局致しました。当時は今で言う初期研修を大学病院で受けることが一般的でした。しかし、期せずして入局後1ヶ月を経ずに鶴田登代志教授から研修制度が整備された静岡市立静岡病院への移動を命ぜられました。当時の静岡病院は基本的には京都大学の関連施設であり、ローテーションでお世話になった指導医の大半が京都大学からの派遣医でした。研修医には研修先を選択する自由が与えられましたので私は心臓血管外科、脳外科、婦人科、耳鼻科で研修を受けています。最も長期間お世話になったのは心臓血管外科であり、麻酔・ICU研修などもそこで受けています。この時代は冠動脈バイパスや人工弁置換術、人工血管置換術などが革新的に進歩した時期であり心臓血管外科の発展が大変華々しかったのですが、京都大学には心臓血管外科学講座はなく、結核研究所に所属する先生方が静岡病院に集まってこの分野の開拓をされていたようです。このため市民病院としては珍しく動物実験施設が充実していました。基礎研究に熱心に取り組む先生も多く、私が研修を受けた2年ほどの期間にも複数の大学教授が生まれています。私たち研修医にも動物実験施設の活用は許されていたので、私は脳外科をローテーションした際にラットを用いて微小血管縫合のトレーニングを受けています。生来不器用な方ですので指導を頂いた清水先生には大変なご苦勞をおかけしましたが、根気よくお付き合いいただき何とか大動脈の吻合に成功したことを懐かしく思い出します。静岡病院整形外科は私を含めても4名という小所帯でしたが、股関節外科、脊椎外科、関節鏡下手術などに精力的に取り組んでいましたので整形外科研修も存分に満喫しました。今にして振り返ると、多様性と自由に溢れたこの研修期間が私の礎となっており、鶴田教授には大変深く感謝しています。

3年目に帰局していますが、当時の三重大学では骨軟部腫瘍外科、脊椎外科、手外科・微小外科が3本柱となっていました。取り分け私の興味を引いたのは藤澤幸三先生が実践するマイクロサージャリーによる再建外科手術でした。藤澤先生は大変器用な方で、外科医としてのセンスにも優れており、整形外科分野に限らず遊離空腸移植など他科からの突然の依頼にも楽々と応じられるスーパースターのような方でした。とても私には真似できる芸等ではないとの思いから実は手外科以外の道を考えていたのですが、凶らずも手外科グループに加えていただく事になり、1986年に日本手外科学会に入会しています。

私の手外科医としての興味は一貫して機能再建外科であり、外科的修復(身体改造と呼ぶべきかもしれませんが)の後に機能が回復していくメカニズムを詳細に分析して新たな治療技術を創出したいと願いつけてきました。臨床現場での気づきを大切に、そこに最新の科学的知見を重ねて尤もらしい仮説を立て、実験医学を適応して仮説を証明できないかと、挫折の繰り返しではありましたが、努力を重ねて参りました。そんな私にとり日本手外科学会は揺籠のような存在であり、経験やアイデアに富む会員諸氏との交流を通じて多くの知恵をいただき、また、切磋琢磨しつつじっくりと育んで頂きました。学会の規定に従い第65回学術集会を最後に正会員からは外れましたが、この思いにはいささかの揺らぎも生じておらず、現在でも自らの経験を最新の神経科学に照らして新たな仮説を模索する日々を過ごしています。16年半奉職した名古屋大学手外科学教授は今年3月に退任しましたが、幸運にも個別化医療技術開発講座特任教授として研究職を継続できる事になりました。微力ながら今後も日本手外科学会の発展に貢献したいと願っています。学会員の皆様におかれましては引き続きのご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します。

新特別会員のご挨拶

新特別会員になって

四谷メディカルキューブ手の外科・マイクロサージャリーセンター 平瀬 雄 一



私が国家試験に合格して慈恵医大形成外科で研修医を始めたときに一番先に入会するように言われたのは日本形成外科学会と日本手外科学会(当時は日本手の外科学会)でした。偶然にもこの2つの学会は同じ年に発足した学会でした。最初の何年かは形成外科学会は面白かったのですが、手の外科学会の方はちっとも楽しくなく、いやいや先輩について学会には行くものの、すぐに抜け出してお茶に行くという感じでした。なぜなら、学会に参加して聞いていても全く理解できなかったからです。参加者の諸先生方の議論も何を議論しているのか全く分かりませんでした。再接着や皮弁の発表をするようになって、入会して20年くらいしたところから少しずつ議論に参加できるようになりました。しかし、相変わらず骨や関節に関するセッションでは理解不能の状態が続いていました。埼玉手外科研究所に転勤になった後も一向に手外科と心中する気にはならず、「手も診れる形成外科医」の地位に甘んじていました。手外科学会のセッションで話が理解できてディスカッションに参加できるようになったのは現在の四谷メディカルキューブに移った13年ほど前からです。そこからは俄然、骨や関節に興味が出ました。特に変形性関節症のとりこになりました。こんなに奥が深くて喜びのある分野になぜ長い間目を向けていなかったのだろうかと思いました。しかし、それは日本国の状況の変化と深い関係があります。わが国ではグローバル化に伴い外傷は減って、人口の高齢化に伴い変形性関節症が増えているのです。都心にある今の病院には再接着や外傷の患者は少なく、外来は変形性関節症の患者であふれかえっています。この疾患に向き合わずには毎日が終わらない状況です。やがて手術だけでなく変形性関節症の発症の背景に興味を持つようになりました。ある日、患者さんになぜ病気になったのかと聞かれて、なんとなく深い考えもなく、使いすぎの説明をしました。その時に、患者さんに強く否定されました。彼女は右利きなのに痛い手は左手だったのです。うまく説明ができずに恥ずかしい思いをし、それ以来、更年期との関連に興味を持つようになりました。今では仕事の大半が更年期手、あるいはポスト更年期手です。

学会ではいろいろな委員会でお世話になりました。国際委員会で日米手外科学会のお手伝いをしたのも思い出ですし、社会保健委員会ではそれまで疎かった保険点数の仕組みが勉強できました。理事となつてからは広報渉外委員会とキャリアアップ委員会の担当となりました。広報渉外委員会では日本手外科学会の社会的認知度の低さに驚きましたが、大きな課題として解決できないままとなりました。キャリアアップ委員会では女性医師と過疎地域での専門医不足をテーマとして取り組みました。この2つの問題はとてもよく似ています。それは彼らには問題提起することはできても

自分たちだけでは問題を解決できないということです。女性医師の問題は女性医師が解決するのではなく、男性医師に突き付けられた課題です。地域格差の問題は地方医師が自分たちで解決する問題ではなく、専門医がたくさんいる地域の手外科医が自分たちの問題として取り組まなければ学会は発展しません。ともに問題の提起までは出来たと思いますがまだまだ解決には程遠い状況となっています。

私が若いころには手の外科学会の特別会員といえば“お爺さん”になるものだと思っていました。ところがいつの間にか40年も経過して自分がお爺さんになったのは少し驚きです。しかし、自分にはまだ伸びしろがあると思っています。これからもスピードを緩めることなく精進する所存です。今しばらく、皆様にもお付き合いいただきたく存じます。今後ともよろしく願います。

2022年度 各委員会委員

(五十音順・敬称略)

●常設委員会

緊急事態対応委員会

担当理事 西 田 圭一郎
委員 小 寺 訓 江 三 浦 俊 樹 柳 林 聡 吉 田 進 二
若 林 良 明
オブザーバー 酒 井 昭 典 佐 藤 和 毅 面 川 庄 平 三 上 容 司

財務委員会

担当理事 西 田 圭一郎
委員長 三 浦 俊 樹
委員 小 寺 訓 江 柳 林 聡 吉 田 進 二 若 林 良 明

教育研修・オンラインマガジン運用委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 山 本 美知郎
委員 今 田 英 明 小 笹 泰 宏 小 野 真 平 児 玉 成 人
齋 藤 太 一 竹 内 実知子 小 多 田 薫 辻 英 樹
辻 井 雅 也 中 川 泰 伸 中 山 政 憲 原 章
オブザーバー 内 藤 聖 人

編集・用語委員会

担当理事 池 口 良 輔
委員長 小 田 良 良
委員 石 河 利 広 入 江 徹 恵 木 丈 大 井 宏 之
織 田 崇 入 河 村 太 介 金 城 政 樹 栗 山 幸 治
小 園 直 哉 小 篠 林 由 香 坂 本 相 哲 佐 々 木 裕 美
佐 竹 寛 史 河 小 篠 原 孝 明 坂 本 川 峰 志 園 畑 素 樹
高 松 聖 仁 辻 藤 本 卷 亮 土 田 真 嗣 長 尾 聡 哉
那 須 義 久 藤 山 部 亮 英 松 井 雄 一 郎 松 末 武 雄
森 澤 妥 二
アドバイザー 河 村 健 二

機能評価委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 金 内 ゆみ子
副委員長 飯 塚 照 史
委員 阿久津 祐 子 小田桐 正 博 志 村 治 彦 茶 木 正 樹
西 脇 正 夫

国際委員会

担当理事 池 上 博 泰
委員長 市 原 理 司
委員 秋 田 鐘 弼 岩 本 卓 士 川 崎 惠 吉 善 家 雄 吉
多 田 薫 中 島 祐 子 藤 尾 圭 司 森 崎 景 裕
アドバイザー 柿 木 良 介 金 谷 文 則 中 村 俊 康 村 田 景 一

広報渉外委員会

担当理事 古 川 洋 志
委員長 寺 本 憲 市 郎
委員 金 谷 耕 平 佐 藤 光 太 朗 堂 後 隆 彦 中 川 夏 子
原 友 紀
アドバイザー 岸 陽 子

社会保険等委員会

担当理事 田 尻 康 人
委員長 岡 崎 真 人
委員 鈴 木 拓 瀧 上 秀 威 建 部 将 広 藤 田 浩 二
普 天 間 朝 上 松 浦 慎 太 郎

先天異常委員会

担当理事 福 本 恵 三
委員長 齊 藤 晋
アドバイザー 関 敦 仁
委員 柿 崎 潤 洪 淑 貴 佐 々 木 薫 佐 竹 寛 史
高 木 岳 彦 鳥 谷 部 莊 八 西 村 礼 司 根 本 充

倫理利益相反委員会

担当理事 福 本 恵 三
委員長 安 田 匡 孝
委員 楠 原 廣 久 佐 々 木 信 幸
アドバイザー 辻 本 律
アドバイザー(外部) 塚 田 敬 義
外部委員 山 我 美 佳

学術研究プロジェクト委員会

担当理事 松 田 健
委員長 加 地 良 雄
委員 安 楽 邦 明 佐 藤 光 太 朗 四 宮 陸 雄 関 敦 仁
高 木 岳 彦 藤 原 浩 芳 森 谷 浩 治

専門医制度委員会

担当理事 西 田 圭一郎
委員長 稲 垣 克 記
委員 池 上 博 泰 射 場 浩 介 垣 淵 正 男 栗 本 秀
佐 藤 和 毅 島 田 賢 一 田 尻 康 晃 田 中 克 己
辻 井 雅 也 松 村 一 森 田 晃 造

専門医資格認定委員会・施設認定委員会

担当理事 古 川 洋 志
委員長 長谷川 健二郎
委員 荒 田 順 岩 川 紘 子 金 谷 貴 子 鎌 田 雄 策
小 橋 裕 明 齊 藤 晋 鳥 居 暁 子 鳥 山 和 宏
堀 内 孝 一 本 宮 真 正
アドバイザー 中 尾 悦 宏 森 田 哲 正

専門医試験委員会

担当理事 松 田 建
委員長 内 藤 聖 人
委員 尼 子 雅 敏 新 井 健 岩 倉 菜穂子 奥 井 伸 幸
幸 田 久 男 佐々木 薫 大 倉 安 剛 裕 郎 竹 内 直 英
田 中 敬 之 根 本 充 西 橋 本 一 郎 長谷川 和 重
アドバイザー 長 尾 聡 哉 南 野 光 彦 西 田 淳 山 崎 宏

カリキュラム委員会

担当理事 内 山 茂 晴
委員長 日 高 典 昭
委員 梶 原 了 治 黒 川 正 人 高 木 誠 司 田 鹿 毅
谷 脇 祥 通 山 内 大 輔

情報システム委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 松 浦 祐 介
委員 岡 久仁洋 栗 本 秀 鈴 木 拓 松 井 雄一郎
宮 脇 剛 司 吉 井 雄 一
アドバイザー 西 浦 康 正

定款等検討委員会

担当理事 内 山 茂 晴
委員長 上 原 浩 介
委員 岩 川 紘 子 岩 月 克 之 大 谷 和 裕 川 勝 基 久
櫻 庭 実 司 前 田 和 洋 松 本 泰 一 村 田 景 一
横 田 淳 司

キャリアアップ委員会

担当理事 副 島 修
委員長 原 友紀
委員 上 里 涼子 長 田 龍 介 洪 淑 貴 千 馬 誠 悦
恒 吉 康 弘 長 尾 由 理 中 川 夏 子 林 原 雅 子
日比野 直 仁 藤 井 裕 子 牧 野 仁 美
アドバイザー 新 関 祐 美

手外科専門医検討委員会

担当理事 副 島 修
委員長 三 上 容 司
委員 助 川 浩 士 田 中 克 己 吉 井 雄 一 吉 田 史 郎
アドバイザー 加 藤 博 之 矢 島 弘 嗣

アンケート調査対応委員会

担当理事 篠 原 孝 明
委員長 山 本 真 一
委員 高 木 誠 司 西 浦 康 正 日 高 典 昭 村 瀬 剛
アドバイザー 平 田 仁

監事紹介

田 中 克 己 西 浦 康 正

物故会員への追悼文

故 Dr. Richard A Berger を偲んで — Call Me Dick —

岡谷市民病院 整形外科 内山 茂 晴

2022年3月 Mayo ClinicのDr. RA Berger がご逝去されたとの連絡を受け取った。

突然の悲報に動揺をしばらく隠せなかった。私がよく知る留学先のHand Surgeonだったからである。私がMayo ClinicでDr. Bergerにお会いしたのが1992年、あれからもう30年もたち、その間の彼との関わりが次々と頭の中をよぎった。

1992年10月、私たち家族はRochester MNに移住して2年間の海外生活がスタートした。

当時Mayo Clinic Biomechanics LaboratoryはDr. KN Anが所長としてLabをコントロールされており、臨床のDoctorたちの疑問点を基礎研究で解決するというような役割を担っていた。



写真：1993年 Biomechanics Lab.集合写真

最前列左から2番目 Dr.An, Dr.Cooney, Dr.Linscheid, Dr.Chao

最後列左から2番目 Dr.Berger, 右から2番目 筆者

Carpal Instabilityが全盛だった頃で、それに関する研究がいくつか進行していた。LabにはDr. Linscheid, Dr.Cooney, Dr.Amadioといった世界的に有名なHand Surgeonが出入りされていた。他にも若手のHand surgeonが時々顔を出しており、その中にひときわ人懐っこくて、早口なのだけれど英語がわかりやすいDr.Bergerがいた。私は自己紹介の時に Dr.Bergerと呼びかけたときに、“No, Dick, call me Dick”と言われ、どうしてRichardがDickなのだろうと疑問に思いながらも言われた通りに、“はい、では Dick..”といったところ、Good sign (thumbs up)をしながら、ニコッと微笑んでおられた。それからは Dick, と呼べるようになり、私がfirst nameで呼べる数少ない 外国人になった。

DickはanatomyでPhDを取得されており、さらにMD、いわゆるMD, PhD、であり、当時のアメリカ人のclinical fellowが“Dr.Bergerはすごい、何と言ってもMD, PhDと両方持っている”と強調していた。Dickの仕事は 手関節疾患に関することがほとんどを占めており、詳細な解剖学的所見がアプローチや治療法の根拠になっていた。Labに時々来られては私たちの実験に臨床的なsuggestionをしてくださった。話を始めると早口でなかなか終わらない、これは他の日本人の同僚も同じ感触を持っていたが、どんなに早くても英語の90%以上が理解できたので、恐れることはなかった。というわけで我々日本人fellowにとっては大変嬉しくありがたい存在で、DickがLabに来られるのをいつも楽しみにしていた。

私たちが帰国後もDickは時々日本の学会から招かれ講演をされていた。最近お会いしたのは平成18年2月、甲府市で開催された東日本手の外科研究会(浜田 良機先生会長)だった。もちろんご挨拶申し上げ、近況を語り合ったのを覚えている。基礎研究に明け暮れたMayo Clinicでの2年間で私の整形外科医としての活動基盤であることを痛感している。恩師であるHand Surgeon, Dr.Bergerのご生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表し、心から“Thank you, Dick”をお別れの言葉といたします。どうか安らかに眠りください。



故 井上博先生を偲んで

筑後市立病院整形外科顧問 吉田健治

日本手外科学会特別会員、元久留米大学医学部助教授、故井上博先生のご遺徳を偲び、先生のご霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

先生は1953年に久留米医科大学(現：久留米大学医学部)をご卒業になり姫路市広畑製鉄所病院でのインターンを経て、1954年久留米大学整形外科学教室へ入局され宮城成圭教授に師事されました。医局長、講師を経て医学博士の学位を取得され1967年から西ドイツ、デュッセルドルフ大学整形外科へ留学されIdelberger教授のもとで研鑽されました。1971年に久留米大学医学部整形外科助教授にご就任され、ご専門の分野であります手外科・四肢外傷・骨折の診療では精力的にご活躍をされ学生はもとより教室、同門の医師に対して診療を通じて教育に熱心に取り組まれました。先生の理論に基づいた講義や講演は印象深くいまでも脳裏に深く刻まれています。医局ではいつも早朝から外国文献を訳されておられるお姿が懐かしく思い出されます。有用な治療法に関してはいち早く取り入れて臨床に生かしておられ日本手外科学会をはじめ多くの学会へ報告、論文掲載がなされました。小児の上腕骨外側顆骨折に対する術式であるtension band wiringについては教室での動物実験による研究と臨床研究をまとめられ、臨床では成長障害は問題にならないことをご報告されました。本術式は現在も広く行われる有用な治療法であります。学会での講演や討論では先生の理路整然とした発言内容に学問に対する先生の真摯な姿勢と実直なお人柄を垣間見ることができました。1983年には第6回日本骨関節感染症研究会(現：日本骨関節感染症学会)の会長、1985年には第11回日本骨折研究会(現：日本骨折治療学会)の会長を務められました。これらの業績から日本骨折治療学会名誉会員、日本骨・関節感染症学会名誉会員、西日本整形災害外科学会名誉会員となられ日本整形外科学会功労賞を授与されました。1987年には久留米大学を退職され、筑豊労災病院顧問として第一線病院で後進の指導と地域医療に貢献されました。この間、1992年には大学での研究33年間とその後の診療の集大成とも言うべき著書「小児四肢骨折治療の実際」を出版され、読者に非常に好評でさらに2001年には第2版が出版されるに至りました。この著書は先生の豊富なご経験と理論に裏打ちされた名著であります。診断から治療まで臨床の場に即した解説、家族への説明にいたるまで詳細に記載されており今や整形外科医の必携の図書になっています。巻頭言にも記載してありますようにインフォームド・コンセントについて「治療側に複数の治療の選択肢がある場合には患者側にも同じように複数の選択肢があること」が重要であると強調されています。先生の多くの業績や先生の教えは大きな遺産であります。先生、永年に亘るご指導ご鞭撻ありがとうございました。ここに先生のご生前のご功績を偲び、ご冥福をお祈り申し上げ、お別れの言葉とさせていただきます。先生、どうぞ安らかにお眠りください。

令和4年7月31日

教育研修会お知らせ

◆2022年度教育研修会◆

会 期：2023年1月20日(金)～3月20日(月) ※予定
会 場：WEB開催(オンデマンド配信)
詳 細：準備中

.....

◆第66回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2023年4月20日(木)～21日(金)
会 場：京王プラザホテル(新宿)
会 長：佐藤 和毅(慶應義塾大学医学部スポーツ医学総合センター教授)
詳 細：<https://site.convention.co.jp/jssh2023/>

.....

関連学会・研究会のお知らせ

◆第33回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2022年9月9日(金)～10日(土)
会 場：慶應義塾大学三田キャンパス
会 長：岡野 栄之(慶應義塾大学医学部生理学教室 教授)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jpns2022/>

.....

◆第31回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2022年10月13日(木)・14日(金)
会 場：岡山コンベンションセンター
会 長：木股 敬裕(岡山大学 形成再建外科学)
詳 細：<https://www.kwcs.jp/jsprs-kiso2022/index.html>

.....

◆第37回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2022年10月13日(木)～14日(金)
会 場：シーガイアコンベンションセンター
会 長：帖佐 悦男(宮崎大学医学部整形外科 教授)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/joakiso2022/>

◆第49回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2022年12月1日(木)～2日(金)
会 場：アクトシティ浜松
会 長：大井 宏之(聖隷浜松病院 手外科・マイクロサージャリーセンター)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/49jsrm/>

◆第33回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2022年12月9日(金)～10日(土)
会 場：パシフィコ横浜 会議センター
会 長：町田 治郎(神奈川県立こども医療センター 総長)
詳 細：<http://jpoa2022.umin.jp/index.html>

◆第40回中部日本手外科研究会◆

会 期：2023年1月28日(土)
会 場：広島県医師会館
会 長：砂川 融
(広島大学大学院医系科学研究科上肢機能解析制御科学 教授
一般社団法人 津下メモリアル広島ハンドクラブ理事長)
詳 細：<http://chubutegeka40.com/index.html>

◆第37回東日本手外科研究会◆

会 期：2023年1月28日(土)
会 場：にぎわい交流館AU
会 長：千馬 誠悦(社会医療法人明和会 中通総合病院 副院長)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/ejssh37/index.html>

◆第44回九州手外科研究会◆

会 期：2023年1月28日(土)
会 場：沖縄産業支援センター
会 長：金城 政樹(琉球大学 整形外科)
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/khand/>

◆第35回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：2023年2月3日(金)～4日(土)現地開催(Live-Web配信)
2023年2月10日(金)～3月10日(金)(オンデマンド配信)
会 場：やまぎん県民ホール、山形テルサ
会 長：高原 政利(泉整形外科病院 院長)
詳 細：<https://www.elbow2023.jp/index.html>

◆第66回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2023年4月26日(水)～28日(金)
会 場：出島メッセ長崎
会 長：田中 克己(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 展開医療科学講座 形成再建外科学 教授)
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jsprs2023/index.html>

◆第35回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2023年4月22日(土)～23日(日)
会 場：御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンター
会 長：飯塚 照史(奈良学園大学保健医療学部)
詳 細：<https://meeting.jhts.or.jp/web/35/>

◆第96回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2023年5月11日(木)～14日(日)
会 場：パシフィコ横浜
会 長：尾崎 敏文(岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授 生体機能再生・再建学講座(整形外科学))
詳 細：<https://joa2023.jp/>

編 集 後 記

今年も例年以上の酷暑の中でCOVID-19第7波がやや減少傾向にありますがまだまだ予断を許さない状況です。ただ実際の社会生活では様々な制限が緩和されコロナ禍前の生活に戻りつつあるような印象を受けます。学術集会でも対面での開催が可能となり本年は酒井昭典会長の第65回日本手外科学会が福岡県北九州市で無事開催されました。新理事体制も決まり、日手会ニュース号外号では岩崎倫政理事長をはじめ、副理事長、各理事の先生方の抱負を、また長年手外科の発展に貢献された新名誉会員となりました平田仁前理事長、新特別会員の平瀬雄一先生のご挨拶を掲載しております。御多忙中にもかかわらず御執筆いただいた先生方には深く御礼申し上げます。今回Richard A Berger先生、井上博先生の訃報に内山茂晴先生、吉田健治先生に追悼文をいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

8月10日のハンドの日には産経新聞、朝日新聞に手外科について掲載していますが、一般的な認知度は高いとはいええない状況です。

広報渉外委員会も新たに堂後隆彦先生をお迎えし、前委員長の岸陽子先生にアドバイザーをお願いして新たにスタート致します。今後も手外科の情報を発信しその責務を全うしていく所存ですのでよろしくお願い申し上げます。

(文責：寺本憲市郎)

広報渉外委員会

(担当理事：古川洋志、委員長：寺本憲市郎、アドバイザー：岸 陽子
委員：金谷耕平、佐藤光太郎、堂後隆彦、中川夏子、原 友紀)